

J. ハーバーマスの科学方法論

北村 健之助

1. 科学二元論

かつて新カント主義によって点火された自然科学的研究と文化科学的研究との方法論的識別をめぐる激しい論争は現在ではほとんど忘却されている。現在の科学主義的意識は、方法論的諸命題のなかに依然として見出される根本的な差異については全く意に介してないふうである。科学二元論は実証主義という規準によって解消される。かくて実証主義的傾向は現実諸科学の統一に志向する。経験的同一性に関する法則諸仮説を獲得し検証する一般法則的な科学 (nomologische Wissenschaft) がこの傾向を代表するのである。それは理論自然諸科学の領域を超えて心理学, 経済学, 社会学, 政治学の領域にまでおよぶ。

他面では、歴史的解釈学的諸科学は古きものを破壊することなく伝統的な意味内容を継承し、分析的に加工しながら発展している。ハーバーマス (J. Habermas) によれば、その方法が精密経験諸科学のモデルに統合されるといふ何等の徴候をも見出すことはできない。実証主義者にとってはとるにたらない諸科学の分離もこの傾向においては明瞭に意識されるのである。『研究活動に明らかに受け容れられている永続的な二元論は研究の論理の領域ではもはや議論されることはない。それは科学理論の分野では排除するわけにはいかない。それはただ2つの関連体系が共存するということのなかにのみ意義を見出すのである。関連する諸研究の類型に応じて、科学理論はそれぞれ経験諸科学の一般方法論もしくは精神諸科学や歴史諸科学の一般解釈学を形成してきた。諸科学におけるそれぞれの限られた独特の考察に関する最も進歩した状況をポPPER (K.R.

Popper) やガダメアー (H.G. Gadamer) の諸研究を引合いに出すことによって取敢えず明らかにしておこう。分析科学理論と哲学的解釈学とは双方共に交り合うことはない。これに関する議論は専門用語的な領域と部分的に分けられた領域の境界を超えるようなことはない。分析家は一般に学問の序論において、解釈学的な諸原理を非難する。解釈学者は一般法則的な科学とは逆に、総じて限定的な前了解 (Vorverständnis) に依存する⁽¹⁾』といわれるのである。しかし彼は、分析科学理論と解釈学的基本考察という兩岸に、橋を架けることは可能であるという。確かに、科学二元論がある領域における分析的解決の可能性を認めるのでなければ、それを蔽っている霧に接近しなければならない理由は全くないのである。社会諸科学の領域では様々なアプローチや目的に出会う。社会科学の諸原理は混乱せる同時代的な発展を示している。だから論理的な鍛練と統一的なプログラムによって除去しうる混乱ともいべき未成熟な論争や不透明な方法論的問題を記述することが切実な問題となってくるのである。彼によれば、実証主義者はこの懸念の一掃に躊躇しない。伝来の社会諸科学から不要なものを除去して、一般的原理的統一的な経験分析的行動科学 (empirisch-analytische Verhaltenswissenschaft) を生み出している。理論自然諸科学と変らないのである。心理学や社会心理学の分野においても、また経済諸研究においても見出しうる傾向なのである。社会学的諸研究は大抵の場合、活動理論 (Theorie des Handelns) の構造的・機能的領域に密着している。この場合、活動は観察しうる行動もしくはは規準に従う目的合理的活動を意味するわけではない。結局多くの社会学的、政策科学的諸研究は一般理論との連関から離れて歴史的なものに向けられる。3つの理論的アプローチはそれぞれ共にその権利を要求する。実証主義がいうように不完全かつ不明瞭な方法論的諸前提からは明らかにはならない。複合する諸アプローチが一般行動科学という共通の広場を求めることもあろう。しかしまず除去しなければならない混乱を識別することが問題なのである。社会諸科学において形成され競合する諸アプローチは、社会に関する一般諸理論が客観的な自然過程の場合と同様に同一の方法で構成されえないという事情から、むしろ消極的な関係調整のもとに置かれている⁽²⁾。自然諸科学と精神諸科学の場

合、確かに協調的に平和共存しうるのであるが、社会諸科学においては異なった諸アプローチの緊張を1つの屋根の下で調停しなければならないのである。その研究実践においてはことに分析的方法と解釈学的方法との関係が考察されることになる。

2. 二元論批判

自然科学と文化科学とを方法論的に精密に把握しようと試みた最初の研究者はリッケルト (H. Rickert) であった。彼はディルタイ (W. Dilthey) の認識批判的な精神科学に対する場をうるために、カント主義的理性批判の要求を一般法則的科学の妥当領域に限っている。それは先験哲学的領域において試みられる。了解というカテゴリーによって諸現象は一般法則のもとでは「自然」であるのに対して、「文化」は事実関係を通して諸価値の体系として形成されている。文化現象の個性的な価値関係に繰り返すことのない歴史的意味が与えられる。彼はヴィンデルバント (W. Windelband) によって主張された精密な個性記述的科学が論理的に不可能であることを洞察し、不可避的に一般的な繰り返しうるものに向けられた表現の中で歴史的事実という同一の繰り返しえないものの把握に志向するのである。ハーバーマスによれば、彼の提言では事実を十分に説明することはできない。彼の生活哲学的前提は無言のうちに体験する現実の非合理性なのである。認識する精神を先験的調和的に把えようとする場合に、この前提は代替的な諸見解に分裂するのである。現実は合法則的な連続性もしくは様々な個性という形で分離されたまま把握されている。理論的関連体系の選択は1つの完全な代替を前提する。1つの体系発言を他の体系発言に簡単に変換することは許されない。先験的立場に立てば、「異種の連続」(heterogener Kontinuums) こそが分裂した現実を統一することができる。安易になされる統一は限定された了解のジンテーゼとはならない。⁽³⁾

しかしながら価値カテゴリーそのものが論理的一般として妥当しなければならないし、一般法則のもとで「自然」として理解される現実価値関係を通して個別化されなければならないとするならば、それはいかにして可能であるのか。

リッケルトによれば、諸価値は類別概念のように同一の論理的規準をもたない。文化諸現象はそのために構成した諸価値を、同一の方法で諸要素を分類するがごとくに類別するようなことはないのである。⁽⁴⁾ハーバーマスは『だが、こうした主張はそれが形成される先験的論理においては果されない。リッケルトは歴史的全体 (geschichtliche Totalität) の概念をはっきり書き換えなければならない。何故ならば彼を支えている弁証法的手段を信頼していないからである。先験的意識批判という前提から出発する精神科学の論理はヘーゲルによって主張された特殊と一般の弁証法を拒みはしない。このことはヘーゲルを超えて、非同一的なものと共通して認められる歴史的個性としての文化現象という概念をもたらすのである。カントからヘーゲルに至る出入りするところのない通行所における対立はそのまま価値哲学に生きつづけている。リッケルトは先験的理念主義を踏まえて、まず「文化」という概念を構成する。「自然」というカテゴリーと同様に、「文化」は諸現象の本質として価値体系のもとで先験的な意味をもつ。——それは対象については何も語らない。対象を可能な限り理解するための諸条件を規定するのである。この場合、価値体系は実践理性からアプリアリに演繹されねばならないというオプティミスティッシュな仮定が妥当する。リッケルトはただちにそれを放棄しなければならなくなるだろう。いわゆる諸価値の形而下的な充実は歴史的主体の価値志向的活動が放棄した諸文化の現実関連から解明されるにすぎない。——諸価値の妥当性はまたこのような発生史には無関係なのだが。そうであるとすれば、文化に関するカント主義的概念は、対象精神に関するヘーゲル思考のなかで弁証法的に発展してきたが新カント主義によって拒否されている先験的—経験的二義性に帰することになる。文化諸科学はその対象をすでに構成的に見出している。経験的に妥当する価値体系の文化的意義は価値志向的活動の結果として生じる。それゆえに歴史的に生じかつ伝えられた諸価値を経験的に形成する場合には、価値志向的に活動する主体が先験的に決定したものが保存されているのである。活動主体の頭脳によって一片の先験的意識を放棄する、すなわち先験的に拡がった諸価値の網の中でのみ妥当性を要求することができるということに客観性を持たせる科学の

対象領域のなかに、歴史的に1つの分野が導入される。リッケルトは「先験的規範」(transzendente Sollen) という概念でもって、歴史的実在的な意味連関という対象を正当に評価しようとしている。しかしながらこうした考え方では、矛盾だけが浮彫りにされる。この場合、事実と諸価値、経験的存在と先験的妥当性、自然と文化というふうに明確に識別することは無益な浪費なのである。リッケルトは先験哲学の諸決定を放棄するつもりはないのであるから、このことは彼を無意識的にずたずたに引き裂いてしまうことになる。先験的規範という突破口を通してなんの障碍もなく修復を試みるリッケルトに対して、価値哲学は、リッケルト自身が隠蔽しているものすなわち理念的存在に関する純然たる存在論を明らかに承認しているのである⁽⁵⁾』とのベリッケルトの徹底した二元論を批判し、一般妥当的なものは個性的(価値関係的)なものであり個性的なものは一般妥当的なものであるという弁証法的思考を強調している。

今日の科学論理はその前提をカントの理性批判に求めるようなことはない。現在では一般法則的諸科学と解釈学的諸科学等の考察に結びついているということができよう。分析科学理論は論理構造および一般諸理論選択の規準をうることで満足する。先験的な把握を断念し、命題と事実との二元主義を堅持するのである。哲学的解釈学は自然と自然法則に関するカント的概念を受け容れつつも文化的現象界の構成を捨て、伝統の意味を吸収し説明することに目標を絞っている。ハーバーマスによれば、科学の二元論的省察をリッケルト的に試みるものは非カント的諸前提のもとにあっても、リッケルトが引き裂いたカントからヘーゲル(G.W.F. Hegel)にいたる傾向を今もって踏襲しているのである。こうした傾向は今日ではもはや意識批判の領域に入れることはできない。言語の先験的批判の領域⁽⁶⁾においてのみ可能なのである。

3. 二元論の克服

カッシルラー(Cassirer)は諸命題の文法を判断する論理に関する実証主義的言語分析の応用に志向している。日常用語的もしくは経験科学的に利用される記号諸システムにおける形式的諸関係に限られるわけではない。先験的諸成果

の媒介物としてのシンボル (Symbole) がこれに関連するのである。発生史的に区分される妥当性の先験的な意義を棄てないで歴史的に具体的な意味の経験的意義を求める価値の二義的カテゴリーを避けて、シンボリックな諸形態の論理的連関が追究される⁽⁷⁾。現象から把えられる対象は直観と了解というカテゴリーによって直接的に構成されるのではなく、感性の領域では明瞭な先験的成果によって構成される。すなわち実在が感覚的印象を与える体系的に整えられた諸シンボルを創造することによって構成されるのである。了解は諸現象を統合することはできない。シンボルは与えられたもののうちでそうでないものの徴候を透明にする。内在界は直観的に不完全な現実を表現しうる諸形態を作り出す度合に応じて観念的に現実化する。現実には叙述される場合に現象となる。叙述は先験的意識の基本機能である。その遂行はシンボリックな諸形態の文法的諸関係から明らかにされる。純粹理性批判から離れたシンボル諸形態の哲学は先験的立場をとりつつ言語の論理的分析を試みている。シンボリックな諸形態に関する言語は経験科学的要請によって構成された記号体系よりも豊富である。言語は科学はもちろん神話、宗教、芸術をも包含する。カッスルナーはリッケルトと同様に精密経験科学的認識批判をさらにすべて文化諸現象の一般的批判にまで拡大⁽⁸⁾している。

いかなる精神的基本機能も、本源的構成力を内在し構造力は内在しないという点では認識上共通している。この基本的機能は受動的に存在を表現するばかりでなく、現象という素朴な Dasein に一定の意味、固有の理念的内容を与える精神という独自のエネルギーを含むのである。このことは認識に妥当すると同時に Kunst にも妥当する。また神話や宗教についても同様のことがいえる。それらはすべて独自の形成界をもっているのである。形成界は経験的存在を単純に模写するのではなく、むしろ独自の原理に従って創り出されるのである。だからそれぞれ固有のシンボリックな形成が行われる。それは知的シンボルには一致しなくとも精神的源泉は共有する。また単に他のものに同化したり他のものから推論されるというようなものではなく、それぞれ特徴のある精神の見解とそのなかでそれによって構成された現実固有の側面に同化するかあるい

はそこから推論されるのである。⁽⁹⁾ハーバーマスによれば、様々なシンボルシステムが将来における真理要求なのである。科学は特殊な真理という特権を失う。哲学はそれ自身で省察的、限定的にこの特権を留保するのである。真理の認識はシンボリック叙述の先験的な諸条件に関連するのであり、叙述されたものを考察することによっては果されない。シンボル諸形態のなかで創られた世界像を通して現実というものを探知するのである。だから本質が解明される最も高度の客観的真理は、結局は、それに固有の行為の形態であるということに尽きよう。固有の諸成果を総合し、それぞれが規定される特殊な法則を認識する場合には、それ自身および現実の直観が本質なのである。絶対的に現実的なものは本質的なものではないという意見が思考の幻影であることは今更いうまでもないことである。⁽¹⁰⁾

カッシーラーは自然諸科学と精神諸科学とを明らかに識別している。リッケルトはこの2つの科学を経験科学であると考えている。今や精神諸科学はメタ理論 (Metatheorie) としての地位が与えられており、一般法則的な諸科学は形式的に樹てられた記号体系で現実に関する発言を創り出している。これらの諸科学はそれぞれの領域で部分的に把えられた現実を叙述する神話、技術、宗教等と同じ傾向をもつのである。これに対して文化諸科学はシンボル諸形態的諸関係に志向する。それは現実に関する情報を与えるのではなく情報に関する発言を創造する。その課題は叙述しうる現実のある部分を経験的に分析することにあるのではなく記述諸形態を論理的に分析することにあるのである。『したがってリッケルト理論の難点が徘徊する。個別的特殊と非古典的一般との和解の問題は、与えられた諸シンボルの関係を形態的視点のもとで分析せんという要請だけがある限り念頭に浮ぶようなことはあるまい。一定のシンボル言語の文法はなるほど総じて戻ることのない総体性であることは判るのであるが、カッシーラーは Kunst, 神話, 宗教, 科学における様々な文法は同じカテゴリーのもとででき上っているということを論証している。多様性の統一を総合的に行うこのカテゴリーの先験的一般性を、カッシーラーはさらにシンボル記述によって説明しえたのである。文化諸現象の分類も問題になることはない。たとえ物

質界の領域における物理学的記号としてのシンボルが与えられたとしても、それは自然諸科学が関係する経験的諸現象と同一視されてはならない。それはむしろ世界が諸主体をすべて現象させうるための先験的な条件なのである。したがって文化構成に関する科学は因果分析的に取扱うのではなくて形態分析的に取扱うのである。それは活動の構造的連関に向けられるのであり諸事実の実際的な結合に向けられるのではない。歴史的に伝統的なものや経験的に存在するものがシンボル諸形態に密接に関わろうとも、それは先験的論理という省察的立場を共有するのである。こうした要素はリッケルトの場合のように、解決されないようなものは構成しない。というのはカッシーラーはヘーゲル的に精密に理性をその諸対象から区別するのではなく、先験的意識を同じ先験的で経験的に把えうる諸シンボルの表示から区別しているからである。確かにカッシーラーはシンボル諸形態の哲学から全く区別しえない文化諸科学を明らかにしている。彼は科学の性格をそれらから剝ぎとっているのである』とのベカッシーラーがリッケルト理論の難点の克服を諸領域を統一的に理解しうるシンボル諸形態によって試みていることを指摘している。

理性の構成領域における科学二元主義は大きな犠牲を要求する。一般法則的諸科学の発言は本来、経験的确实性に対してとくに妥当性要求を主張することはできない。というのは公式化される科学言語は原理的には神話とか伝説といった言語と同一線上に立つからである。ハーバーマスによれば、科学的発言の妥当性はカッシーラーが先験的意識の発展史を扱うためにシンボル体系の基礎源泉を放棄する場合にのみ認められる。歴史という領域はシンボル諸形態の哲学には含まれないのである。文化諸科学はこうした欠陥を共有する。それはシンボル諸形態の一般的文法のための報道者なのである。しかしこの諸形態を構成する歴史的過程、文化の中で伝えられ習得される伝統関係は文化諸科学に眼を閉ざしたままである。それらは非歴史的に扱われる。歴史を蒸発させた構造諸科学 (Strukturwissenschaften) なのである。リッケルトが方法論的立場をすぐれて説明しようとした歴史諸科学はカッシーラーの網の目を抜け落ちて⁽¹²⁾いる。

カッシーラーは1942年頃はまだ文化諸科学の論理に結びついていた。新しい

本源的統一的な統覚や仮説的な領域了解という諸成果を解明しなければならない表象知覚 (Ausdrackswahrnehmung) に関する現象学および心理学は、自然界の構成に対する問題にとっては意義があるのであるが科学論理にとっては意義のある原理ではない。カッシルラーは科学類型の源を特殊な経験に求めている。事物知覚と表象知覚との対立関係の中に自然諸科学と文化諸科学との方法上の対立を見出すことができる。一定のシンボル体系を利用して特殊な概念構造と知覚構造が推論される場合にのみ、この視点とシンボル諸形態の哲学との関係が維持されるのである。ハーバーマスは『科学二元主義を説明しようとする新カント主義の2つの試みはたいした効果を残していない。問題設定は経験的諸科学の方法論的自己了解から消え去ってしまったのと同様に、哲学的意識からもほとんど消え失せてしまっている。——それ以外のものにまでもおよんでいる。ヴェーバーはリッケルトに結びつき、社会諸科学に関するその方法論的原理に大きく影響をうけているのでヴェーバーの科学論に関する議論は今日まで続いている。哲学的視点から考えれば、それはアナクロニズムではあるが同時に、社会諸科学の研究においてリッケルトやカッシルラーによって取り上げられた問題は実証主義的科学論理とは異なって未解決であるということへの証明なのである』⁽¹³⁾とのべ科学二元論を展開する新カント主義的方向を批判しながらも、その影響をうけ今日に至るもなお論議の対象となっているヴェーバー理論に関心を示している。

4. 技術的知識への方向

ヴェーバーはリッケルトやカッシルラーのように、認識論的視点のもとでは自然諸科学や文化諸科学との関係にはとくに関心を向けていない。歴史的にみて純粹理性批判のために19世紀に発展した精神諸科学は可能であったということが決して彼を不安に駈り立てるようなことはなかった。デュルタイ以来この問題に関わりあってきた哲学的諸研究は、彼にとっては固有の研究を反省するために利用する手段にすぎないからである。体系的視点から彼は新しい社会諸科学は自然諸科学や文化諸科学の様々な手順方法、目的、諸前提を調整しなけれ

ばならない。ハーバーマスによれば、ヴェーバーはとりわけ説明と了解との組合せを研究している。両者の結合はそれが手順方法、目的、諸前提の複合に関連しているかどうかに応じて様々な規準を絡み合わせている。ヴェーバーの科学理論はこの複合を識別する場合に、より透明になる。彼の社会学は社会的活動を説明的に了解し、それによって活動の諸作用を因果的に説明せんとする科学なのである。社会的活動の一般理論は経験的合法則性に関する諸仮説を推論する。この諸仮説は説明に役立つのである。社会的活動の合法則性は自然過程の場合とは異なって了解的であるということによって独自性が示される。社会的活動は遂行後にその意味を理解することができる意思的活動なのである。社会的事実は動機了解 (Motivationsverstehen) の領域に含まれる。与えられた条件のもとでの社会的行動に関する最適の了解は合法則的な連関が実際に存在するという仮説に対する論拠とはならない。仮説は動機了解的解釈の明瞭性とは無関係に確認されねばならない。了解と説明の論理的関係の源は、それゆえに仮説的な構想と経験的な再検証との一般的な関係に求めることができる。観察される行動は動機としての合理的に追求される目的であるというふうに了解される。かくて樹てられた合法則的行動に関する仮説が与えられた状況のもとで経験的に確実に検証されるならば、動機了解は社会的活動の説明を可能にすることになる。この論理的関係は、ヴェーバーがなぜ目的合理的活動に方法的に特権を認めているのかも理解させうるのである。意味了解的に加工された目的、仮定された意思は、目的が活動における実際に豊富な動機を与える場合にのみ経験的に確実な説明を可能にする。しかしそれは活動が目的合理的に選択された手段をもって実現する成果に対する意思によって支配されている場合に限られる。主体的一義的に理解される目的に対する適切な手段の選択に志向する目的合理的活動という類型がこれに当て嵌まる。この活動類型を絶対的に認める諸理論は純粹経済学のように規範的一分析的に展開される。それは社会的過程を目的合理性という方法原理に実際に一致させるような非常に狭い領域においてのみ経験的に内容豊富な諸仮説をうることができるのである。⁽¹⁴⁾したがって問題は、了解的ではあるが目的合理的な諸活動に関する体系的な仮説をいかにし

てうるかという点に集中する。

この種の理論は経験的—分析的領域において了解と説明とを結合する。ヴェーバーは、目的合理的行動は比較するために構成された目的合理的な流出モデル (Ablaufmodell) の差異としてのみ研究されうると考えている。こうした問題に直面して、社会諸科学は「活動の意思性」の考察に関心をはらってきた。了解の問題は手順方法に関連する限りにおいて、動機了解によるその解明可能性に関する法則諸仮説が記述的行動変数の諸関連に限られる場合に解決されるのである。ヴェーバーも将来の研究に、意味がある特殊な行動に対する非了解的な合法則性を発見する可能性を期待している¹⁵。それは意味適合の要求を満たすことはなくても社会的活動を十分に説明することができよう。しかしながらヴェーバーは社会諸科学の領域からはこのような法則を原理的に排除するのである。社会諸科学は社会活動の研究において自然科学的な地位をうることができるわけであるが、意思的活動に向けられる社会諸科学は一般法則的精神諸科学以外の何物でもありえない。

ハーバーマスによれば、ヴェーバーは社会学は社会的事実を文化意義に照らして了解すると同時に文化制約的に説明しなければならないという。この場合、説明と了解の関係を社会諸科学の目的に関連させている。ヴェーバーの諸決定には2つの相対立する意思が同居しているのである。『ヴェーバーはある面では、常に経験的—分析的な課題を強調している。それは確証された法則仮説によって社会的活動を説明し、条件づきの予測をすることにある。このような視点のもとで、社会諸科学はすべての一般法則的諸科学のように目的合理的手段選択に対する技術的に保証された諸情報を創り出すのである。それは生活すなわち外的事物も人間活動をも計算によって支配するがごとき技術に関する知識を提供する。この種の技術的に応用しうる知識は経験的同一性の認識に依存する。この知識は限定された予測の範囲内で、対象となる過程の技術的処理を可能にする因果的説明の原理なのである。この関心によって左右される社会科学的認識は、それゆえにただ目的に従って手段を開発し、社会的行動の信憑性のある一般法則を粘り強く探究しなければならぬ』とのペヴェーバー理論のも¹⁶

う一つの側面を指摘すると共に、社会科学的認識の成果に技術的応用可能性の意義を見出している。実際、経験的合法則性を示す諸科学が提供する第1段階の技術的知識を利用しながら、諸戦略の目的合理的な選択に関する諸情報すなわち第2段階の技術的知識の獲得を目指すハーバーマスの規範的—分析的知識の真髄であるということもできよう⁰⁷。こうした分析は社会的活動の意味了解(Sinnverständnis)によって媒介される。主体的に構想された意味を了解しようとする意思は社会的事実への扉を開く。さらにこの入門的了解を超えて合法則的関連が因果的に把握される。そしてはじめて本来の認識が達成されるのである。

リッケルト学派においては、文化科学はその関心を経験的合法則性の探究に消耗させるわけにはいかない。ハーバーマスは社会科学的認識の発展ということから考えれば因果分析的解釈的处理の方法が適切であるという。かつて認識は意味の説明、生活実践的意味の説明、了解に絞られてきた。これを理解するには意味了解にではなく説明に求めるべきである⁰⁸。

かくて彼は『ヴェーバーは2つの相反する思考を明確に結合させていない。彼はこのことについて何か思い違いをして、SinnとBedeutungというカテゴリーを様々に応用してはいるが十分に説明していないのである。ヴェーバーは結局、社会的活動に関して主体的に思考されたSinnを認める動機理解(Motivationsverstehen)と研究もしくは実践の中で客体化されたBedeutungを採り入れた解釈学的意味了解(hermeneutische Sinnverständnis)とを厳密に区分していない』⁰⁹とのべてヴェーバー的方法をも批判している。彼によれば、動機理解は意味外的(sinnfremd)すなわち解釈学的非了解的法則知識を目指す経験的—分析的科学的領域においては方法的手段であると考えられている。社会諸科学において2つの相対立する認識志向が生じるのは、認識主体がその対象領域に直観的に結びつけられているからである。社会的生活界は社会科学的認識と同様に意識的連関であるということが出来る。文化諸科学の先験的哲学的説明はこの連関に依存しているのである。社会的過程の一般法則的知識は限られた予測や管理社会領域におけるコントロールにも利用されうる。同様に認識する主体の

自己了解やその社会的関連集団を解釈学的に説明することができる。そして研究上の方法論領域における対立関係は研究成果の応用機能をもって明らかに説明されうるのである。⁽²⁰⁾

説明と了解との関係の問題は、社会諸科学の手順方法と目的に関連するばかりでなくその認識論的諸前提にも関連するのである。社会諸科学は文化諸科学のように、非説明的前了解 (ein nicht explizites Vorverständnis) に結びつけてその対象領域を方法的に区分しうるのであろうか。ハーバーマスによれば、ヴェーバーはリッケルトが用いた価値関係 (Wertbeziehung) というカテゴリーを先験的論理的意味において利用している。このカテゴリーは科学的問題の選択に関わりをもつのではなく、文化科学的研究には重要な経験の中で可能な対象の構成に関係するのである。精神科学者はこうした対象を固有の文化的状況のなかに嵌め込む価値関係に不可避免的に結びつけている。したがって方法的に一定の価値諸関係と前構成的な対象のなかですでに具体化されている価値諸関係との調和を計らなければならない。リッケルトはこのような調和の問題を解釈学的な問題として認識していない。ヴェーバーはそれを半ばまで分析し価値自由という公準を見出している。⁽²¹⁾ 自然諸科学は研究の結果によってコントロールされる理論的領域をもっている。それは認識方法的には確かに実り豊かであるが、応用しうる諸仮説の推論には何物をも提供することはない。これに対して方法的に導かれる価値諸関係は文化科学的研究を先験的な状況下に置いたままである。それは研究の結果によってコントロールされえない。価値理念によって大きな問題に当てられた光がさらに拡がれば、文化諸科学はその立場や概念装置を変えようとするし、研究の意味と方向を示しうる星座を捜し求めるであろう。社会科学的諸理論は一般的解釈に依存する。この解釈は内在的経験科学的規準によっては確認されえないし反証されえないのである。価値諸関係は方法的には不可避免的であるとしても、客観的には無用である。社会諸科学はそれゆえに、理論的な基本仮説の規範的な諸前提への依存性を明らかにすることを妨げてきたのである。価値自由の公準はこのことに関連している。

かくてハーバーマスによれば、今日では一般法則的な諸科学の理論構成は同

じ法則を基礎に置くという見解が支配的である。価値自由は記述的で規範的な内容を含む諸発言の識別によって保証される。問題の選択は評価によって行われる。価値自由という公準は科学政策的立場の価値を明確にする場合に獲得される。このような理論は、科学的にはその価値に従うのである。しかし解釈学的に説明される歴史的な前了解に関する基本仮説はこの限りではない。それゆえに因襲的に導入されることもありうるのである。ヴェーバーは、社会諸科学における価値関係のない理論的基本仮説や歴史的諸関係をもたない理論的基本仮説や歴史的諸関係をもたない理論的基本仮説が可能であるという意見には反対している。問題の選択ばかりではなく、理論的領域の選択も歴史的に妥当する価値関係によって規定されるのである。⁽²⁾社会科学的研究とそれが志向する対象関連との方法論的に実り多い相互依存関係において様々な問題が生ずることは明らかである。ハーバーマスの見解にみる限り、この方法論上の一定の価値関係は内在的な領域には効果的な現実関連として社会科学的分析に関連しうるし、さらに理論的領域を選択する際に依存する原理決定の経験的態容は社会的過程に関連して説明されうるという可能性が示唆されている。ヴェーバー科学論における社会学的現実分析と方法論とのこのような関連は明らかに指摘されうるわけであるが、ヴェーバー自身はこのような省察は避け新カント主義に実証主義的に同調しているといわれているのである。

- (1) Habermas, J., Zur Logik der Sozialwissenschaften, 4. Aufl., Tausend 1977, S.71-72.
- (2) ebd., S. 73.
- (3) ebd., S. 74-75.
- (4) Rickert, H., Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, 5. Aufl., Tübingen 1929, S.739ff.
- (5) Habermas, J., a.a. O., S.75-77.
- (6) ebd., S.77-78
- (7) ebd., S.78.
- (8) ebd., S.78-79.
- (9) ebd., S.79. Cassirer, Philosophie der symbolischen Formen, Darmstadt 1956, S.9 より引用している。
- (10) ebd., S.79-80.
- (11) ebd., S.80-81.

- (12) ebd., S.81-82.
- (13) ebd., S.82-83.
- (14) ebd., S.83-84.
- (15) Weber, M., Aufsätze zur Wissenschaftslehre, Tübingen 1922, S.189-193.
- (16) Habermas, J., a.a.O., S.85-86.
- (17) ebd., S.135-138. 拙稿「ドイツ経営経済学における批判合理主義をめぐる諸問題」『駒大経営研究』第9巻第3号, 29頁。
- (18) Habermas, J., a.a.O., S.86-87.
- (19) ebd., S.87.
- (20) ebd., S.87.
- (21) ebd., S.88.
- (22) ebd., S.89-90.